慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ労働戦線の労働科学研究所年報（一九三八年）
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.1 (1941. 1) ,p.137(137)- 146(146)
JaLC DOI	10.14991/001.19410101-0137
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410101-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

谷口吉彦「新體制の理論」柴田敬「日本經濟革新案大綱」

て居るであらうか。國營失敗の因が何處にあらうと、國家の權力を以てすら民營の能率に適はなかつたといふ事實は蔽ひかくし得ないのである。過日公表された經濟新體制案では民營を原則とすと定めてあるが、之は如何にも穩當な考へである。

谷口柴田兩博士とも猶ほ以上紹介吟味した議論の外に、新體制の政治組織に就て、新體制の産業團體組織に就て、又東亞新秩序について語つて居られるが、私は紹介批評を此處で打ちきつてそれ以上述べようと思はない。經濟の新體制の骨子は蓋し大體に於て以上で以て論議されたと思ふからである。政治的論議をするには筆者は其方面の專問家でないし、遠慮しなければならぬ。産業團體の組織については筆者は餘り興味をもたぬし、又そゝは理論的研究の對照たるより寧ろ現實の組織と照し合せて個々の場合について解決すべき性質のものであつて、紙上で一律的な計畫を立てるのは單なる空想に陷り易いのではないかと思ふのである。東亞の新秩序は畢竟するに將來の希望乃至豫想であつて、大體の構想は誰にでも許されるが、細かい點は今後の事態の進展につれて解決してゆかねばならぬことゝ考へて居る。

我が日本は日獨伊軍事同盟によつて、ルビコン河を渡つたのである。骰子は振られた。全體主義の流に棹して進むことは國是となつた。如何なる結果が我國にふりかゝらうと、我が聰明なる軍官の爲政者達はもう成算を得てゐるのであらう。此上は躊躇することを止めて、國策に必要な改革を國民の信頼の中に指導し其協力を計るだけである。而して國策に協力する意味で學界からも色々な意見が發表されるのは大いに歡迎すべきである。柴田・谷口兩博士が多年の學識の内より新體制の構想を公表せられたる其熱意と勇氣には大いに敬意を表せねばならぬ。筆者も亦新體制の爲に微力を盡さんことを志して此小文を草した。斯學の先輩の所説を評するに際し、禮を失せざる樣、用語を愼んで積りである。不測の妄言あらば御叱責を俟つ次第である。

ドイツ勞働戰線の勞働科學研究所年報（一九三八年）

藤林敬三

一

私が此處に極く概略的な紹介を行はうとするのは、ドイツ勞働戰線の勞働科學研究所の一九三八年の年報である——Jahbuch 1938, 2. Bde. hersg. vom Arbeitswissenschaftlichen Institut der Deutschen Arbeitsfront——が、恐らく一九三九年の年報が既に公刊せられてゐるであらうし、また一九四〇年の年報が目下準備されつゝあることゝ推測され得る。從つて新刊書の紹介としては、私のこの紹介文は稍々不適當であるかも知れない。しかし私はこの機會に併せて、ドイツ勞働戰線が持つ勞働科學研究所の存在の意義を、幾分でも讀者に傳へ得ればと考へ、そして寧ろ私はこの點に重點を置くことを以つて、本紹介文の目的としたいと思ふ。

二

ドイツ勞働戰線の持つ勞働科學研究所は、ナチス黨中央組織部長であり、ドイツ勞働戰線の全國指揮者であるロベルト・ライに依つて、去る一九三五年に設立せられた。從つて私が此處に紹介しようとする年報（一九三八年）は、同研究所の第四年報に相當する譯けである。

今、私は不幸にしてこの年報以外の、特にこれに先き立つ諸年報を見ることを得なかつたので、この勞働科學研究所の組織、活動、目的等に關して、未だ充分の知識を持つてはゐないが、（註）私の手にし得た年報の緒言に於いて、ライのいふ所に依れば、この勞働科學研究所は僅かに四年の短期間の間に、小規模のものから急速に發展し、既にドイツ勞働戰線の最も重要な支柱の一つとなつてゐる、と見做されてゐる。そしてその第四年目に於けるこの研究所の調査及び研究が、如何に廣汎に行はれてゐるのかは些か後に示す通りであるが、この點から觀て、ライのいふやうに、勞働科學研究所の存在が今日のドイツ勞働戰線を支へる最も重要な一支柱であることは、決して誇張の言ではないやうに思はれる。そしてこの勞働科學研究所の任務とする所は、同じくライのいふ所に從へば、實際社會政策のために、あらゆる方面に於ける科學的研究の進歩を利用せしめるにあり、またドイツ國民のために、急激なナチス的建設に即應する研究者を以つて、超世間的な書齋的學者に置き代はらしめ得ることにある。ドイツ勞働戰線内に於ける勞働科者研究所の、このやうな任務とその存在の意義とは、同研究所の年報の裡に最もよく現はれてゐる。

（註）傳へられる所に依ると、この勞働科學研究所は、ドイツ勞働戰線の中央組織中の經濟局内にあつて、「勞働法制上の諸問題、社會的經濟的方面の調査事業等に從事」してゐる。そして同研究所には、「中央圖書館、統計審議所、中央文書記錄整理所等」が附屬してゐる、といふことである。（産業報國聯盟編、各國の國民組織と勞働組織、八二頁）一九三八年の年報の卷頭には、研究所に附屬されてゐる勞働戰線の中央圖書館、中央文書記錄整理所、及び中央統計調査所の同年中に於ける活動の擴充整備狀況が報ぜられて居り、更らに内外多數の新聞及び雜誌の切抜き、論文の整理に特別の努力が拂はれ、絶へず研究者の便に供せられてゐるといふことも報告されてゐる。これ等は共に勞働科學研究所の附屬設備として、重要な意義を持つてゐることはいふまでもなからう。

さて、一九三八年の勞働科學研究所の年報は、同年中に於ける同研究所の調査と研究の結果を收錄したものであつて、大冊二卷合計一三二〇頁の大部のものであるが、しかも此處に收められてゐるものは、同年中に於けるこの研究所の研究業蹟の僅かに一部分に過ぎない。項目にしてこれを見れば、同年中に行はれた研究は二九六項目の多數に及び、また統計的調査が三二項目に渡つて行はれ、合計三二八項目の研究調査が行はれたのであるが、年報に收錄せられてゐるものはその内單に一三の研究（年報第一卷）と、一七の統計的調査（年報第二卷）に過ぎない。しかも項目にしてこの僅かの一部分を收錄するのに、右に述べたやうに、相當大部の年報を必要としたのである。吾々は此處で先づ、勞働科學研究所の活動が如何にも大きいことを思ふべきであらう。そしてその研究業蹟の全部が年報といふ形に於いて公表されることを、吾々が期待することは恐らく不可能である。年報編輯者もこの意味のことを述べてゐるが、またその研究業蹟中には一部分秘密保持のために公表を避けられたものもあるとのことである。しかし元來これ等の研究調査は、急速に展開されつゝあるナチス的建設努力中に於ける實際社會政策に對して、信頼し得る科學的基礎を提供するにあつて、必ずしも一般にこれを公表することが重要視されてはゐない。しかもこの年報に於いて、一般の讀者に對して勞働科學研究所に於ける諸科學的研究の綜合の可能と、孤立的研究者の努力に對して協同研究の甚だ優れてゐることゝを示すのが、また年報編輯者の自負する所である。年報の編輯に關してはこれ以上に述べられてはゐないが、この企圖は年報中に吾々の充分了解し得る所である。

一九三八年の年報中に收錄されてゐる調査研究は、次ぎのやうである。即ちその第一卷中には、「一九三八年末に於ける社會經濟的狀勢」、「勞働時間と國民經濟」、「勞働と自由時間の問題への寄與」、「年齡と作業能力」、「疲勞——

作業諸條件――能率の增進」、「ベドー・システムの檢討」、「新獨領（オーストリア）と舊領域に於ける織布工の能率比較に關する勞働科學的研究」、「農業勞働者問題」、「炭礦に於ける炭價と生產費」、「新獨領オーストリアとズデーテン地方に於ける原料生產經濟」、「ザールパルツ地方に於ける勞働者の生活狀態に關する地域的相違」、「アフリカ植民地に於ける社會政策」、「ズデーテンドイツ人の史的考察」、等に關する研究と覺書が收められて居り、その第二卷中には、「一九三七年七月十五日に於ける食物、燃料、燈火に關する小賣價格及び家賃の調査」、「オーストリアと舊來のドイツ領域に於ける物價の比較」、「一九三八年ウキンに於ける生活物資の價格」、「オーストリアに於ける家賃及住宅問題」、「同じく賃銀調査」、「勞働時間統計」、「一九三七年中の勞働者家計調査」、「ウキーンに於ける勞働者と養老年金收得者の家計調査の結果」、「一九三八年前半期に於けるドイツ勞働戰線の災害統計」、「ハレ＝メルゼブルク及びマグデブルク＝アンハルト兩地方に於ける勞働者の住宅工場間の通勤狀況」、「製紙諸工場に於ける經營從屬者の年齡構成」、「一九三三年末と一九三六年末に於ける鑛山經營從屬者の年齡構成」、「一九三八年七月一日南ハンノーヴァー＝ブラウンシュワイク及びハレ＝メルゼブルク兩地方の諸經營に於ける家族手當の問題」、「自家屠殺を行ふ肉屋の調査」、「一九三七年事業年度に於けるドイツ諸工業に屬する一五六〇の株式會社の福利施設費に關する統計」、「婦人の賃銀に關する諸考察」、「賃率規則に於ける平準的請負賃銀の統制」等の統計的調査と研究資料とが收錄せられてゐる。

右に擧げた諸調査研究の各々の占める紙數には相當の相違があつて、その內には僅かに數頁に渡るに過ぎない所の、單なる資料も含まれてはゐるが、全體を通じてこれ等の研究は、先きに示した勞働科學研究所の任務に從つてナチスの建設的努力中の緊急問題に對する科學的關心を甚だ強く示してゐることは、吾々の見逃し得ない所であらう。

三

一九三八年のドイツ勞働科學研究所の年報に收められてゐる調査研究の一つ〳〵に就いて、此處に紹介批判することはむろん一般讀者に取つて意義なしとしないであらう。また勞働科學的研究として、吾々の學ぶべき多くの見解がこれ等の調査研究中に含まれてゐることも事實であつて、勞働科學的研究に關心を有するものに取つては到底見逃し得ない重要な文獻である。しかしその個々のものゝ紹介批判は暫らく別の機會に讓ることゝし、私は此處では、最初に述べて置いたやうに、これ等の研究全體を通じて、勞働科學研究所の科學的研究の意義を些かでも明かにすることを以つて滿足したい。

第一に、吾々の知らうとする所は、その所謂『勞働科學』に對する基本的見解の如何である。勞働科學研究所と稱されてゐる以上は、其處で行はれる一切の科學的研究が勞働科學に關する何等かの基本的見解に統合せられてゐるものと見なければならぬ。しかし私が此處に紹介の對象とするものは、同研究所の謂はゞ第四年報であつて、特にこのやうな基礎的な問題に觸れてゐる所はない。この問題は寧ろ初期の年報の內に恐らく取り擧げられてゐるのではないかとも想像せられる。從つて今更らこの第四年報に就いて、同研究所の勞働科學の理解を求めることは勿論その所ではないやうにも思はれる。しかし不充分ではあるが、この年報所收の諸研究から、其處に理解せられてゐると考へられる勞働科學の見解を幾分でも摘出して置くことは、讀者のためにも決して無意義ではなからうと考へる。

年報第一卷中の諸研究に就いて見れば、特に、「勞働時間と國民經濟」、「勞働と自由時間の問題への寄與」、「年

齡と作業能力」、「疲勞、作業諸條件、能率の增進」、「新獨領と舊領域に於ける織布工の能率比較に關する勞働科學的研究」等に於いては、稍々明瞭に所謂『勞働科學』に關する見解が示されてゐる。即ち例へば、「疲勞、作業諸條件能率の增進」の研究の最初に示されてゐる表解に從へば、勞働者の現實の作業結果は彼の作業力と機械その他の物質的諸設備の綜合的結果であり、彼の作業力は作業可能性 Leistungsfähigkeit と作業意志の綜合的表現である。そしてこの兩者を決定するものとして、次ぎのやうな諸事情が擧げられてゐる。

先づ作業可能性は、(1)性格的、肉體的、精神的素質、(2)作業の要求する身體的活動(筋肉、神經、感官)、(3)作業諸條件(練習、單調、リズム、速度、作業時間、照明、溫濕度、騷音、作業空間、作業の位置、道具、原料)、(4)生活諸條件、(a)經營內、(b)經營外(兩者に共通の問題として榮養、休息、自由時間、休養、住宅、健康指導)、の諸事情に左右され、更らに作業意志は次ぎの諸事情に關聯すると考へられてゐる。(1)勞働の喜悅、(2)本質的關心(人種的、體質的、性別的、個性的)(3)作業評價、(a)觀念的、(b)物質的、(4)協同社會生活、(a)經營內(同僚、上役、協同作業、競爭、社會的)(b)經營外(政治的、文化的、社會的)尙ほ作業可能性に影響する諸事情は同時に作業意志に重要な關聯を持つものであることが示されてゐる。

凡そこのやうな見解は人間勞働に關する勞働科學的理解を適當に示し得てゐると同時に、それは勞働科學的諸研究の分野と、結局この勞働科學的諸研究が、人間作業力の增進といふ實踐的目的に從つて、綜合せらるべきものであることを示してゐるといつていゝ。そして此處に勞働科學が如何なる學問的性格を持つてゐると考へられてゐるかは、容易に理解せられるであらう。即ち、勞働者の精神的・肉體的方面に關する心理學と醫學的研究は素より、勞働者の生活を廻つて勞働者心理學の研究がまた重要な意義を持ち、更らに社會科學的諸事情が或は勞働者の作業可能性を通じて、また或は彼の作業意志と關聯して、結局彼の作業力の大小に影響するといふ視角の下に、勞働者の生活を廻る諸事情に關する社會科學的研究が、此處に綜合せられる可能性があり、またさうされることに依つてのみ、生產者、ナチス流にいへば、創造者としての勞働者に對する實際方策が科學的に完備せられ得ることゝなる。このやうに考へ得るとすれば、此處に理解せられてゐる『勞働科學』は、勞働者と彼の生活に關聯する諸事情の研究を行ふ一切の科學的努力の綜合である、といふ風に理解せられる。但し諸科學的研究を勞働科學的に方向づけ、從つてまたそれ等を綜合するための基準が、作業力の問題に歸結することを忘れてはならない。先きに述べたやうに、年報編輯者がこの年報を通じて、勞働科學研究所に於ける諸科學的研究の綜合の可能を示さうと企圖してゐるのも、正にこの意味に解せらるべきものであらう。そしてこのやうに理解すれば、もはや吾々はこの年報中に、例へば、「一九三八年末に於ける社會經濟的狀勢」に關する研究や、石炭價格とその生產費に關する研究が――炭價の大小は消費財の價格に影響し、從つてまた實質賃銀の問題とも重要な關係を持つといふ意味に於いて――含まれてゐても別に異とするに足らない。但し此處に收められてゐる原料生產經濟の研究の如きは、原料生產中特に食料品の生產に關聯しては、その研究が勞働科學的綜合に於いて相當の重要さを持つことは容易に理解せられるが、この研究は寧ろ鐵鑛產出その他に關聯して、所謂大ドイツのアウタルキー化の意義を明かにしようとしてゐる點で、幾分勞働科學的ではなくなつてゐるやうである。

第二に、この年報所收の諸研究調査を一見して何人も直ちに氣づく所は、舊墺國及びズデーテン地方の研究調査が比較的多くの部分を占めてゐることである。そしてこのことはいふまでもなく、一九三八年三月の墺國の獨逸への合併と同年十月上旬に於けるズデーテン地方への獨軍の進駐といふ大ドイツ政策の實現に相應するものである。

しかもこのことに就いては、それが勞働科學研究所の存在を著しく特徴づけてゐることを看過してはならない。即ち、勞働科學研究所がドイツ國民の發展的努力の裡にあつて、現實の緊急問題と關聯して早刻實施せらるべき社會政策のためにその科學的基礎を提供しようと努めてゐることを、これ以上明瞭に示してゐるものはないといつていゝからである。ライのいふやうに、確かに勞働科學研究所は急激に發展するナチスの建設的努力に即應する科學的研究機關としての意義を充分に發揮してゐる。そしてこのやうな意味に於いて、その研究活動が廣汎多岐に渡つて指導せられて行く所に、この勞働科學研究所の、ドイツ勞働戰線に對する重要な一支柱としての意義が、滿されてゐる譯けである。

勞働科學研究所の研究がこのやうに現實の緊急問題に即應して行はれるといふ點で、或は讀者は次ぎのやうな疑問を持たれるかも知れない。即ち、其處では勞働科學的研究を理論的に更らに深く掘り下げて行くといふ努力が輕視せられてゐるのではなからうかと。このやうな疑問は一應尤もであるが、それは全く當つてはゐない。私に此處に年報所收の個々の研究調査の科學的評價を割愛したけれども、その各々は多少の程度に於いて、勞働科學的研究の發展水準を引き上げるに役立つものであつて、特に吾國のやうに勞働科學的研究の發展が甚だ遲れてゐる所では、この年報は全體として吾々の學ぶべき多くのものを持つ重要文獻の一つであることを、私は斷言して憚らない。

四

『勞働科學』は今日でも世界各國を通じて未だ耳新しい學問的名稱である。勿論ドイツの應用心理學者であつた故オット・リップマンが、勞働科學の學問的樹立のために拂つた努力は、既に約十年前のことに屬する。しかも彼のこの學問的努力は勞働科學をして現に實踐科學的には寧ろ一歩後退の性格を持たしめたものであつた。しかし私は實踐科學的足場に強く立つことに依つて、諸科學的研究の綜合の意味に於いて、彼の努力とは別に、勞働科學を考へ得るとするものであるが、（註）ドイツ勞働戰線の勞働科學研究所の存在は、正にこの意味に於ける勞働科學の將來の發展のために、吾々の注目すべきものであらう。

（註）拙著　勞働科學論（現代經濟新書）　參照

尙ほ私は此處にドイツ勞働戰線の勞働科學に對する要請に就いて些か觸れて置きたいと思ふ。

ナチス・ドイツの四ケ年計畫は各產業部門の勞働者に就いて強く勞働能率の增進を期待してゐたことはいふまでもない。しかしこのためには從來の資本主義的な、生產に於ける客體としての勞働者の、謂はゞ物格化的能率觀や、またソヴェートに展開されたスタハノフ運動の如き、寧ろ「有害な刺戟方法」が問題とせられるのではなく、人間の正しい理解から出發しなければならない。研究報告のある部分に說かれてゐる所に從へば、ナチスの世界觀の影響の下に、從來の勞働能率概念は一部分修正され、同時に擴大されねばならなかつた。即ち、一切の政治的並に經濟的事象の中心が人間にあり、一切の經濟的諸方策は人間にそしてまた國民共同社會に役立つものでなければならないし、他方に於いては人間こそ彼の作業能率の唯一の擔當者であり、究極能率の大小を動かすものであるからである。資本主義的な、謂はゞ物格化された人間勞働の能率概念が、ナチスの世界觀に依つて揚棄せられ、勞働能率增進問題の中心として精神的、身體的存在としての人間が正しく理解される所に、勞働科學的基礎見解が容れられ、その科學的實踐の發展のための眞實の基礎が置かれてゐる。私は從來繰り返し機會ある毎に、資本主義的能率概念からは、眞に科學的な、勞働科學的研究と實踐とが發展し得ないことを指摘して來たのであるが、右の意味に於いてドイツの勞働科學研究所の今後の發展に更らに大いに注目すべきものゝあることを、重ねて一般讀者のために特

に注意して置きたいと思ふ。

ドイツに於けるこの勞働科學的研究の短期間に於ける急激な發展に比して、吾國に於ける勞働科學の研究は甚だ遲々たるものである。それは資本主義的能率概念を充分に清算することを爲さなかつた社會經濟的事情に依ると同時に、またこの從來の能率概念を眞に科學的に修補擴大すべき勞働學的、指導的見解が缺如してゐたからでもある。しかし今や時代は移つて、企業の國家的存在の意義が强調され、公益優先の理念が高く揭げられ、勞資一體、事業一家の產業報國運動が廣く展開せられるに至つた。そして生產に從事するものは總て職域奉公の精神の下に能率の最大發揮が要請されつゝある。各企業の下に於ける勞働者の職域奉公の實踐は、產業報國運動の組織下に置かれてゐる。吾々は此處で、ナチス・ドイツの勞働科學研究所に追隨するまでもなく、產業報國運動の諸實踐を科學化し、眞によくその效果を期待し得るためには、吾々も亦勞働科學的研究を充分に展開しなければならないし、またそれが可能である時に立ち至つてゐることを知らねばならないであらう。しかし勞働科學に對するこの時代的要請は、未だ必ずしも充分に自覺されてゐるとはいへない。例へば、厚生省の厚生科學研究所は、これを忌憚なく批評すれば、重點主義の下に於いて寧ろ勞働學研究所たるべきものであつたらうに、この色彩は甚だしく暈されて了つてゐて、勞働科學的、綜合科學研究機關としては、此處から吾々は餘り多くのものを期待し得ない。それでも一部に傳へられる所に依れば、日本勞働科學研究所が軈て大日本產業報國會に發展的に合併せられるといふことであるが、

（註）これが一日も早く實現され、その組織と研究活動が更らに擴充されて行くことは、吾國に於ける勞働科學の發展のために、また國家的要請を滿すためにも、誠に望ましいことである。

（註）昭和十五年十二月三十一日東京日々新聞

前號（第三十四卷十二月號）目次

◉財政理論の發足　永田清
——財政學の理論的課題續稿——

◉經濟の政治化　氣賀健三
——全體主義經濟政策の根本問題——

◉ケインズの長期豫想理論　千種義人
——資本の限界效率理論を中心として——

◉日光御用船引人足出入一件　野村兼太郎
——（社會經濟史料紹介）——

◉王子製紙株式會社編纂
『楮及楮紙考』
『三椏及三椏紙考』　高橋誠一郎

◉三田學會雜誌第三十四卷後半目總次

◉一冊定價金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
◉半ケ年分金貳圓九拾錢
◉一ケ年分金五圓四拾錢　郵稅共（特）

◉編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
◉營業に關する用件は發賣元宛
◉原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十五年十二月廿五日印刷納本
昭和十六年一月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十五卷第一號

東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內
編輯兼發行者　江田範保
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者　金子鐵五郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷所　金子活版所

東京市芝區三田二丁目一番地
發賣元　丸善株式會社三田出張所
電話三田(45)九二六番　九二七番
振替口座東京一八五二番

◉尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會
振替口座　東京一八二〇四番　慶應義塾　芝區三田二ノ二